



「マネジメント」の格言 P・F・ドラッカー

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパート23回目からは、しばらくドラッカーの格言をご紹介します。これまでも要所で引用してきた、「マネジメントの父」の珠玉の言葉。ここからは各回のテーマに沿って、泰斗に我がコラムを補強、総括していただきます。まずは「マネジメント」から始めましょう。

その1: マネジメントの「役割」

「組織が存在するのは、組織自身のためではない。社会、コミュニティ、個人のニーズを満たすためである」「マネジメント」とは、その組織を実際に動かすもの。「その役割は、人が共同して成果をあげることを可能にし、強みを発揮させ、弱みを無意味なものにすること」に尽きます。

そしてその先には、いま多くの組織で忘れられている行動が、ずばりと指摘されています。「マネジメントとは、個の責任とコミュニケーションを基盤とする。組織の成員すべてが自らの目標を考え、他者がそれを理解していることを確かめなければならない。同時に、自らが他者の恩恵を被っていることを伝え、他者がそれを理解していることを確かめなければならない。さらに、他者に期待していることを考え、他者がそれを理解していることを確かめなければならない」。

その2: マネジメントの「評価基準」

次に「マネジメントを評価する究極の基準は、事業上の成果である。マネジメントとは実践である。したがってその仕事に免許を与え、あるいは特別の学位をもつものだけに資格を与えることによって、マネジメントを専門化することほど、経済と社会に害をもたらすことはない」と警告。

その理由は、「マネジメントを科学や専門的スキルとして位置づけるあらゆる試みが、経済の攪乱要因の除去、すなわちリスク、好不況、競争、消費者の選択など、予測不能なあらゆる要因の除去の試みへとつながり、つまるところは経済の自由と発展の阻害へとつながる」から。そしてその懸念は昨今、泰斗の予想をはるかに上回る深刻なものとなりました。その専門家たちがひたすら目指すのは、「カネ」という万国共通指標による高評価。そのため彼らの関心は自らが関与する「市場」に限定され、「社会」全体には向かないからです。

📖 出典(上田惇生訳、ダイヤモンド社)

その1:『マネジメント』『新しい現実』

その2:『現代の経営』

その3:『新しい現実』『マネジメント・フロンティア』

その3: マネジメントは「一般教養」

だからこそ泰斗が強調したのは、「一般教養」としてのマネジメントの重要性。それは「知識、自己認識、リーダーシップという人格にかかわるものであるがゆえに教養であり、同時に実践と応用にかかわるものであるがゆえに教養である」「したがってマネジメントに携わる者は、心理学、哲学、倫理学、経済学、歴史、物理学など、人文科学、社会科学、自然科学の広い分野にわたる知識と洞察を身につけねばならない。それらの知識によって成果をあげなければならない」

そして上記に関し、自らの活動を以下のように総括しています。「私がマネジメントの世界に入ったところ、かなりの部分はエンジニアリングから派生していた。会計からきている部分も多かった。心理学からもきていた。しかしそれらのものは、それぞれ別個のものとしてされていた。そして、ほとんど役に立たなかった」それが『現代の経営』によって初めて「体系化」され、「それまでは才能ある者だけが行うことができ、そうでない者にはできないと思われていたことが学べるようになった」のです。

私たちがなすべきことは、その各要素の新たな知見を学び、皆で共有し、泰斗が築いた「体系」をつねに見直し続けること。その組織のコンセプトは、「集団ドラ」。その目標はミドルを境に、上位は「集団ドラッカー」、下位は「集団ドラえもん」。

2022年7月11日 実空